三省堂 国語教育 NEWSLETTER

ことばの学び

KOTOBA NO MANABI

LETTER 4

特集 教室で読む文学

読書と対話

京都教育大学教育学部
寺田守

大学の授業で私は国語科教員を目指す学生たちに様々な形の読書会を経験してもらっています。「少年の日の思い出」を教材とした活動場面を紹介しましょう。あるグループの学生が「そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった。」という一節を取り上げました。学生は「こういった気持ちってどんな気持ち？」と投げかけます。いくつか考えが出される中で、ある学生が疑問を述べました。「微妙な喜びって何？微妙っていうと『この味は

OPENING

にマイナスの感じがするのだけど…。微妙なのに喜びってどういうこと？」たしかに不思議だと皆考え込みます。一人の学生が辞書を引きました。「微妙には、『細かい所に複雑な意味や味が含まれていて、何とも言い表しようのないさま』という意味があるよ。」学生たちは口々に「あー、なるほど」と納得します。「微妙な喜びというのは、あまりうれしくないという意味ではなくて、喜びが繊細で何とも言い表しようがないということなんだ。」この場面では最終的に辞書を引くことで合意が作られましたが、重要なことは具体的な例を考える中で読み飛ばしていた「微妙な」という言葉に注目し、言葉の意味に違和感を抱くという一連の思考が対話の中で展開しているという点です。

COMMENT

対話をしながら文学を読むと、一人ではたどり着けなかった考えに仲間の発言を聞くことで到達します。興味深いことに、人は思ってもみなかった考えを聞き、しかも納得できるとき、思わず「あー」と声を漏らします。そうした「あー」体験が、対話の中で文学を読むことで起こり、理解を推し進めたり文学を読む楽しさを感じさせたりするのです。

文学の授業は学習者が物語の世界に入り込む体験を伝統的に大切にしてきました。近年はそのような文学本来の意義に加え、対話の中で評価したり自分の考えを述べたりすることが重視されています。本を媒介とした対話の中で、理解が深まり、充実感も生まれるという読書文化を編み上げていく授業が大切になってきています。

GUEST COLUMN

いいことば、わるいことば

音楽家・小島ケイタニーラブ

僕は7年前、ある曲を書いた。『サマーライト』というタイトルで、歌詞の中にはこんな部分がある。

現実なんてクソ食らえさ
歪んだ体で駆け抜けろ
放射能の雨に打たれて踊り続ける

今思うと、どうしてこの歌詞を書いたのか、はっきりと思い出せない。しかし、当時の僕は、自分が感じていた鬱屈した気持ちを、編んでは解き、不器用ながら紡いでいったのだと思う。今でもこの曲を歌うたびに、当時の心臓の鼓動が蘇る気がする。『サマーライト』は自分に嘘をつかずに書いた、"僕そのもの"だったのだ。

しかし、この曲はある出来事をきっかけに"僕そのもの"から"他人"になってしまう。それは、2011年の3月、原発の事故だ。

しばらく自分の歌が歌えない日々が続いた。悲しい事故が起きた今、歌詞に「放射能の雨」が入る歌を歌うのはあまりにも「不謹慎」ではないか。放射能は「わるいことば」なのではないか。

それはつまりはその曲を書いた自分自身の否定でもあった。今まで感じたことのない、無力感に打ちひしがれた。

その1ヶ月後、僕はあるステージに立っていた。地震の影響で開催が延期されていた音楽イベントの振替公演である。本当はまだライブなどできる心境ではなかったが、自分が主催だったこともあり、やらざるを得なかった。

僕はそのイベントで、地震の前からすでに歌うことに決まっていた『サマーライト』をセットリストから外した。この曲は歌えない。

しかし、リハーサルで音を出し、一緒に演奏する仲間の顔を見たときに、こんな気持ちがよぎった。

「この曲をなかったことにするのは、ここに集ったみんなをなかったことにしてしまうのと一緒なのではないか」

本番直前でメンバーと話し合い、『サマーライト』を歌うことを決めた。

ライブでは生まれて初めて、目をつむったまま歌った。この歌詞を、一言一句、決して間違えないように、ただただ、このことばたちを輝かせるためだけに歌った。それこそが歌手のできることなのだ。

ライブ終了後、観てくれた福島出身の小説家が僕にガッチリと強い握手をしてくれた。今、一緒に朗読劇の活動をしている古川日出男さんだ。僕は楽屋に戻り、声をあげて泣いた。

この世に悪いことばも、いいことばもないと思う。悪くしてしまうのは使う人間次第だ。自分の中で響かないことばがあるなら無理に使わなくていい。でも、いつか、そのことばが響き出す瞬間がきっとくる。

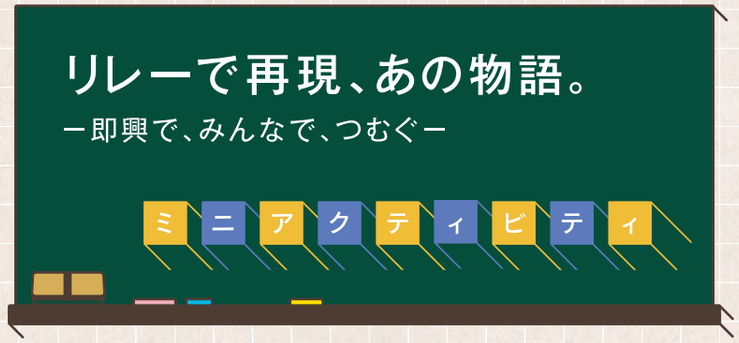
ことばは逃げずに、いつでも僕たちを待っていてくれる。僕たちに今できるのは耳を澄まし続け、ことばを愛し続けることなのではないだろうか。

こじま・けいたにーらぶ
2012年、弾き語り作品『小島敬太』を発表。2011年より、古川日出男、管啓次郎、柴田元幸とともに朗読劇『銀河鉄道の夜』で全国をまわる。ブックカフェ"rainyday"でイベント『ラブナイト』を毎月開催中。
www.keitaney.com

ことばの学び KOTOBA NO MANABI
特集 教室で読む文学
2014年10月15日発行
〈編集・発行人〉北口 克彦
〈発行所〉株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14
電話 03(3230)9446〈編集〉／9551〈営業〉
〈WEBサイト〉http://tb.sanseido.co.jp/
デザイン 宮内 佑／表紙イラスト 沢田 藍子／ひと図鑑イラスト 藤塚 尚子

リレーで再現、あの物語。

ー即興で、みんなで、つむぐー



時間

3〜5分
＊1つのお話の再現時間の目安

手順

1 みんなが知っているお話を3〜8本程度あげる。
＊「桃太郎」「アリとキリギリス」「シンデレラ」「ごんぎつね」「走れメロス」など。

2 グループ（4〜15人程度）を作り、1つずつお話を割り当てる。
＊再現したいお話に集まったメンバーでグループ構成してもよい。

3 お話の「はじまり」と「おしまい」を語る人とそのせりふを決める。
＊大きなグループの場合は、せりふ（発言）が1人1〜2回で、4人程度のグループの場合は、1人3〜5回巡ってお話全体を語り終えることにする。何巡して終わるかをあらかじめ決めておく。

4 グループごとに横一列に並び、再現するお話の「タイトル」「何巡で語り終えるか」を宣言し、リレーをスタート。
＊他のグループは観客としてリレーを楽しみます。

リレーのルール

- せりふは1人1センテンス。
- 2番目以降アンカーまでは、即興のせりふ（アドリブ）でリレーする。

＊「せりふの引き継ぎは10秒以内」「パスは3回まで」などの取り決めもOK。

見どころ

アンカーに手渡すまでの展開を考えながら全員でせりふを調整する、前の人の語りを上手に受け取って、後の人が語りやすいように話をつなぐなどのチームワークが見どころ。話がなかなか進まなかったり、大事な事件が飛んでしまったりという、いわゆる「失敗」は即興ゲームの楽しみの1つです。

バリエーションとして、リレーしながらオリジナルのお話や続編を即興でつむぎあげていくのも楽しい活動です。

三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO 三省堂 SANSEIDO

全国美術館博物館巡り

04｜大阪府

三好達治記念館
（高槻市）

「大阿蘇」「雪」などの詩で知られる大阪生まれの詩人、三好達治。その記念館が本澄寺の境内の一角にあります。

三好は1930年刊行の詩集『測量船』で詩人としての地位を確立。伝統詩を継承しつつ、象徴的で純粋な抒情と格調の高さを追求した詩人といわれています。

館内には自筆原稿のほか、愛用した酒器や茶碗、使用していた辞書、写真や初版本などが多数展示されています。

また、三好の作品史を記念館独自の視点でまとめた年表が掲示されており、これまでとは違った角度で三好を知ることができます。詩風が変わる転換点もそこから見つかるかもしれません。

アクセス

- 阪急京都本線上牧駅下車
徒歩約10分
- 〒569-0003
大阪府高槻市上牧町2-6-31
本澄寺内
072(669)1897 ※事前に予約が必要です。

ルイーズ・ローゼンブラット
Louise M. Rosenblatt
1904-2005
〈アメリカ／文学教育研究者〉

多くの優れた文学教育でさえ典型的なアメリカのスポーツ観戦に似ている

世界で最も有名な文学教育研究者。デューイの思想に強く影響を受けた彼女は、読者とテクスト（作品）の交流の中でこそ意味が作られるという交流理論を築いた。上のことばは、文学の授業が優れた教師の反応を横に座って見物するだけで学習者の反応の場となっていない状況を述べたもの。読者の役割を重視する文学理論の中心人物である。

Q&A QUESTION

プロットとストーリー、どう違う？

ANSWER

「プロット（ストーリー）の巧みさが光る小説だ」――「プロット」と「ストーリー」、国語辞典ではどちらも「筋」という意味が出てきますが、文学研究や小説作法の世界ではいろいろな区別がされているようです。英国の作家・フォースターは、ストーリーを「時間順序に配列された出来事の叙述」、プロットを「因果関係に重点を置いた出来事の叙述」であると定義し、前者を「時間と好奇心の世界」、後者を「論理と知性の世界」と考えました。丹羽文雄は、プロットは「筋」とすると誤解されるおそれがあるので「構成」と訳すべきで、「構成（プロット）は小説の運命を決定するものである」と述べています。米国の作家・クーンツも、プロットは「小説の最大必要条件のひとつ」であり、「テーマはプロットによって暗示されるべき」であると書いています。『国語教育研究大辞典』では、「プロット・構想」の項に「作者の立場から言うと、創作のための意図や考えを具体的、効果的に展開していくために練りあげられた計画のこと」という記述が見られます。

特集 ☾「教室で読む文学」

琉球大学　教育学部　村上呂里

“〈再誕（ルネッサンス）の場〉としての文学の授業”

TOPIC

「子ども・若者の〈闇〉の深さを突きつける事件に“慣れ”る感覚が怖い。文学的想像力＝創造力が今こそ問われる。ミヒャエル・エンデは、自分を「はるかに大きな連関のなかに置いて」眺め直すとき、「ひとりひとりの人間のかけがえのない価値観が新しく生まれてくる」と述べる（『オリーブの森で語りあう』岩波書店、1984）。プロットを読むとは、「はるかに大きな連関のなかに置いて」眺め直すという行為に他ならない。「かけがえのない」再誕（ルネッサンス）へひらく〈場〉として文学の学びを考えるとき、プロットを読む「読み方」を探究していきたい。

「少年の日の思い出」（ヘルマン・ヘッセ／高橋健二訳）は、①語り手「私」が「客」との出会いを語る、②「客」が一人称（「ぼく」）で少年の日の思い出を語る、という2種の語りからなる（さらに全体の連関を統括する存在がある）。②の前半の語りは、生命の煌（きら）めきを余すところなく感じさせる宝としてのチョウの美にとりつかれた「ぼく」を鮮やかに描き出す。「ぼく」は「宝を探す人」だった。ところが、「あらゆる点で、模範少年」であるエーミールとの出会いがこの価値観を変質させる。彼は「チョウ」を、既に生命を失った鑑賞物とみなす。彼を「ねたみ、嘆賞しながら」も「憎む」という、思春期特有の他者への過剰な意識が「ぼく」の価値観を見失わせ、いつしか他者であるエーミールの価値観によって自らの「チョウ」をまなざすようになる。その結果がついには、彼のチョウを盗むという卑劣な行為へとつながる。②の語りには、思春期の緊張感にあふれた自己／他者の関係性と「ぼく」の「チョウ」に対する価値観の変質のプロセスが、チョウの呼称の変化（「宝」→「宝物」→「獲物」→「宝石」）とともに丁寧に描きこまれ、眺め直されている。「ぼく」の治癒と再誕を見通した地点に立って、プロットが周到に仕組まれている。①で客の語りを包む「快い薄暗がり」の「闇」は、②でチョウを粉々に潰す少年のいる「闇」と響き合う。①の「闇」は、少年の「闇」を包み込み、再誕への根源的な痛みを見守るやわらかな「闇」であろう。

「握手」（井上ひさし『ナイン』講談社文庫、1990所収）は、大人になった「わたし」が語り手であり、回想が入り交じる。二回の握手（①ルロイ修道士の「万力（まんりき）よりも強」い握手＝戦災孤児の子ども達に、ここが「あなたたちの家」で「もう、なんの心配もいりませんよ。」と渾身の力で伝える、②「わたし」の握手＝余命いくばくもないルロイ修道士の人生を賭けた思いを受けとめ生きることを伝える）が響き合うプロットとなっている。握手や指言葉は、世代間のバトンタッチの象徴であると同時に、幾重にも癒やしがたい傷を抱えた異文化間の対話の可能性の象徴でもある。戦争で受けた、互いに癒やしがたい深い傷からの再誕への切なる願いが、「握手」という題名にこめられている。

プロットを読み解くことは、「かけがえのない」命として再誕への道をひらく。「読み方」を学ぶとは、再誕の道そのものなのだ。

BOOK GUIDE

「なにが書かれているか」（内容）にとどまらず「どのように書かれているか」（表現）にアプローチし、いかにこれらを統合していくかは文学の学びのポイントといわれます。こうした観点からも教材研究に役立つ情報や授業のヒントが得られる書籍をご紹介します。

01 現代詩大事典

安藤元雄・大岡信・中村稔監修三省堂 2008
A5判／832ページ 12,000円＋税
ISBN 978-4-385-15398-8

島崎藤村、三好達治、谷川俊太郎、新川和江、まど・みちお、中原中也といった教科書の定番といえる詩人をはじめ、約1000人の《略歴》《作風》《詩集・雑誌》を掲載。主な詩人については《代表詩鑑賞》《参考文献》も紹介しています。また、主要な詩集については別項にてその《創刊》《歴史》情報にアクセスできます。「詩と短歌・俳句」「詩の構造と展開」「メタファー」「詩と音楽」「詩の視覚性」「パフォーマンス」という、近現代詩を多角的に「読む」事項も充実。日本初の“総合的・体系的な近現代詩の大事典”です。

02 物語もっと深読み教室
岩波ジュニア新書739

宮川健郎 著　岩波書店 2013
新書判／222ページ 820円＋税
ISBN978-4-00-500739-4

文学研究者の大学教授が中高生を対象に特別講座を開くという形式です。谷川俊太郎、吉野弘、太宰、鷗外、漱石、賢治らの作品を対象に、「語っているのはだれ？」「だれが見たことを語っているの？」「『作者』を忘れる練習」という、「主人公」「語り手」「視点」などの要素や構造に着目する読みの授業が展開。各講義に付く「読書案内」を活用して、さらに学びを深めることができます。